

無機質なエリアに 人間の居場所群をつくる

鉄工所から建て替えられた物流倉庫の、外構と休憩所、バス待合所を計画した。クライアントが営んでいた鉄工所という「人の物語」と、埋立地という「土地の物語」を編み直しながら、無機質なモノづくりの場所を有機質でヒューマンスケールな「人間の場所」に変換することを目指した。

道路沿いに広がる「道の庭」には、常緑樹を中心に植栽を混植し、無機質な工業団地の中に温かい表情をつくる。工事の残土で構成したバス待合所は、仕上がり面に不ぞろいの砂利や残置物を拾った奥深い陰影が現れ、洞窟のような原始的な空間をつくる。これと対比的に、空を飛ぶ鏡面の大屋根は植物や街を映し込み、この土地に流れるさまざまな時間と色づきを増幅する。鉄骨造でしか実現できない構成は、「鉄工所」の記憶を象徴する。更に、これにデッキが取り付くことで多様な居場所群を生成し、施設内外の人々が思いおもいにたたずむ公園のような場を提供している。

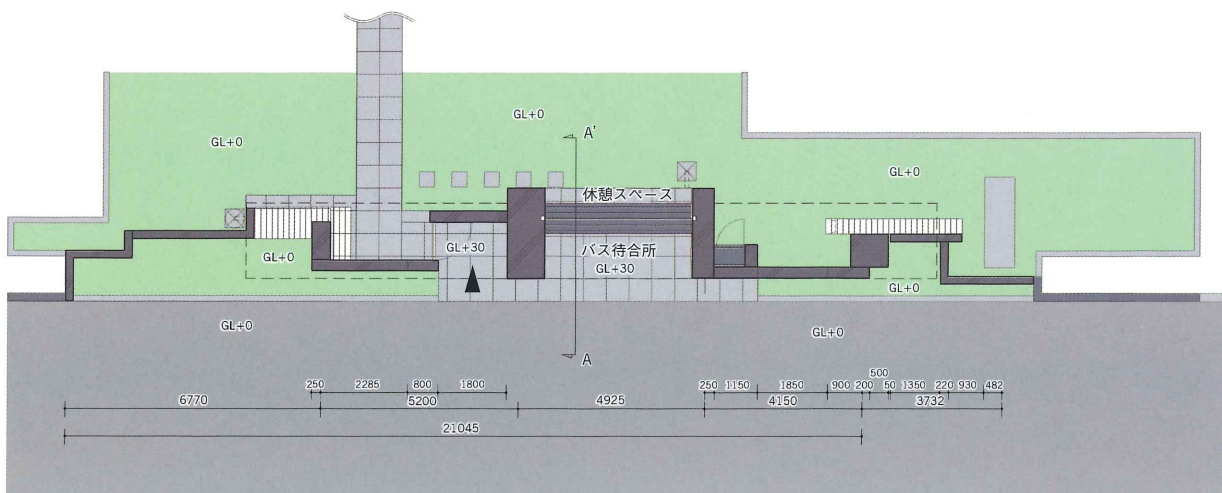
回遊式庭園である「四季の庭」は、季節によって色づきが変化する植栽で構成し、物流施設本館までヒューマンスケールの豊かなシーケンスをつくり出す。

東京湾に面する「海の庭」は、働く人々の憩いの場を提供するだけでなく、かつて東京の表であった水辺に新しい顔を取り戻すことを目指し、海風に強いトロピカルな植物によって特徴的な表情をつくった。

工業用地に求められる広大な緑地を積極的に活用し、海と土地と人間の営みの物語を編み直すことで、無機質な場所に人間の居場所群を生成することができた。これは、人を第一に考える企業姿勢を示した、工業系地区の未来の風景とも言える。 〈菅原大輔〉



上／長屋門の形式を参照した「道の庭」は、バス待合所や休憩スペースなどの機能を備える。鉄工所があった歴史を引き継いで、屋根は鉄骨造で構成。軒裏の鏡面仕上げや正面のガラス張り、堀の高さの変化などによって、見る位置に応じたさまざまな見え方が生まれ、小さな空間に多様な過ごし方を同居させている。ボリュームの切り替え位置にライン照明を配し、凹凸感を強調した 下／「四季の庭」側からアプローチを見返す。道路に近い場所ではツツジや広葉樹などの植栽を配置。義務として求められる緑化をポジティブに捉え、周辺とは異なる居場所としての構えを意図した。ベンチの位置は日当たりなども考慮して決定している



「道の庭」平面図 1:200